

AMCWA会報



NPO法人 アジア母子福祉協会

東京都品川区西五反田2丁目15番7号

ジブラルタ生命五反田ビル3F-ITL

mail: tokyo@amcwa.org tel/fax: 03-6424-5681

ミャンマーのゆくえ

アジア母子福祉協会副理事長 寺井融

深酷な空洞化 1月7日のミャンマーからのニュースには正直驚かされた。中国との国境の町・ラオカイ（シャン州）が陥落し、政府軍（約2,400名の将兵と6人の准将）が、少数民族（コウカン族）の武装組織MNDAAに降伏したという。

そのラオカイから約70kmの地がシャン州北部の中核都市ラシオである。

もし、このラシオが落ちると第2の都市マンダレーまで一直線である。昨年10月末「1027作戦」と称して少数民族3派連合軍による国軍打倒の戦闘が激化し、戦功をあげつつあるようだ。

ミャンマーでは、1948年の独立当初から少数民族軍や共産党軍らとの内戦が続いている。一時、当時の首都ラングーン（現ヤンゴン）周辺まで国軍が追い詰められたことがあった。その後、辺境地帯を除く国土大半を国軍が回復し、中央政府の管轄下に戻ったものだ。

少数民族軍の各軍はもとより、7割を占める多数派ビルマ族の間でも群雄割拠。選挙前には政党が百近くもできるほどで、まとまりが悪いのがミャンマー国民の特徴である。それが、民主派のNLD（国民民主連盟）ともども反軍政で相互連携を深めているとすれば、その影響は大きい。

軍事クーデター（2021年2月1日）が起こって早3年

となる。今後、ミャンマーはどうなっていくのか。戦闘が続くとしてどこから武器弾薬が入るのか、支援してくれる勢力はあるのか。

前回クーデターのとき（1988年）は抵抗が長続きせず、今回も少し犠牲者を出せば反軍政派の抵抗も収まると踏んでいたと思う。いま軍政側も長期化に戸惑っている筈だ。それだけ2011年以降の民主化時代が評価されていたし、携帯電話やインターネットも普及して海外情報も入ってくる。自国の発展が遅れていることも、自覚してきているのである。

そこに軍事クーデターが起こった。若者を中心に海外志向が強まり、流出に勢いが増している。かつて優秀な人は士官学校を目指した。それも、いまは人気がない。

AMCWAが支援している孤児院においても、昔は大学進学の実験室になかなか合格せず、奨学金枠が余っていたが、皮肉なことにクーデター後は彼らの合格率が高まり、枠が満杯となってしまった。特に優秀な学生は海外の大学へ、他の若者は海外での就労を目指している。徴兵制が運用されていくと海外志向がますます強まるだろう。空洞化は深刻だ。

日本の援助で鉄道の保線事業が進んでいたが、それを反軍政側が破壊したと聞く。かつてラオス内戦においては、日本の援助で作られていたダム建設地域を左派も右派も中間派も非戦闘地域としたそう（以下、付録につづく）



ミャンマー、小学校支援の意義

アジア母子福祉協会常務理事

小池匠

アジア母子福祉協会は以前からヤンゴンのダーベイン村の小学校を支援している。



2022年ヤンゴン在住の内科医NiNi先生から、政府から支給されている小学校の教員の給料が足りないのでは何とかしてほしいという依頼を受け、2022年11月以前から支援しているヤンゴンのダーベイン村の小学校に入った。

この時には校長先生と教員4名、計5名に給料の補助とともに教員が通勤の時に使う自転車を4台購入し渡してきた。教員も生徒も交通機関が無いので徒歩での通学となる。炎天下を長い時間歩いて学校に来るのは先生にも負担がかかる。

現在のミャンマーはインフレが進み市民生活はますます困窮している。2011年当初50パーセントだった絶対貧困率はその後回復し軍部のクーデター前ま

では25パーセントに改善していた。しかしクーデター後は再び50パーセントになってしまっている。それに伴い犯罪率も高くなり治安も悪化の一途をたどっている。犯罪が行われているのを見かけても市民は通報しない。警察が動かないのをわかっているからだ。出歩く際に外国人は注意が必要だ。

以前は直行便があったが現在は無くなり、入国条件も日本人は免除されていたビザが再び必要になり、さらにミャンマー保健省の医療保険加入が義務付けられている。まるで海外からの入国を拒否しているかのようだ。

私が小学校を支援する理由は教育が国家のために最重要と考えるからだ。教育が破壊されてしまえば将来国家は必ず衰退する。小学校の教員も同じ考えでそれゆえ政府からの給与が少なくても、遅滞してもボランティア精神で学校に来て生徒を教えてくれている。

今回、2024年4月21日からミャンマーに入る。

（以下、付録につづく）

マダガスカルプロジェクト2023

アジア母子福祉協会会員

原田 新二



おかげさまで23年度もアンバトランピ児童園への支援を中心に実施することができました。

継続的なご支援、ありがとうございます。今年度も日本・マダガスカル協会との共同事業として進めました。

既報のように同園の敷地ではまとまった規模の植樹を行う余地はありません。そこで今年度は長く協力してもらっているNGO活動家アジャさんともに12月に同園を訪問し、クリスマスプレゼントの協力を得てアンバトランピ児童園での樹木の状況を確認しました。

全体として7～8割の樹木は生存して育っていますが、区画により雑草の繁りも見られました。このため今後、できれば数か月おきに訪問して状況を把握し、園の児童達自身に雑草の除去等を進めてもらうなどの対策が必要と思われました。

今後の展開として、園の周辺で新たな植樹地が見つければ園内の育苗施設も活用でき、また園の在籍者が育苗、植樹、メンテナンスなどで活躍できます。しかし園の責任者との話し合いでは、そのような適地は今はまだめどがなく、適地探索についての手掛かりもつかめませんでした。

新年度はまず、アジャ氏の長年の経験から、地元を受け入れ・参画意向が期待でき、AMCWAとして支援する意義のある具体的な取組み対象地について、首都近郊で探索してもらうこととし、その結果を踏まえて、次のステップに進みたいと思います。



なお今回の訪問で児童園から電気、水道、サッカー場、外周柵、ベッドなど様々な整備への支援要請があり、今後の植樹展開の一つの拠点となることも期待し通学カバン取得を援助しました。

引き続き活動へのご支援をよろしく御願いたします。

ミャンマーでの取り組み

ミャンマーでの活動に対する継続的なご支援、誠にありがとうございます。

23年度も連合様「愛のカンパ」をはじめとするご支援に基づき、ミャンマー母子福祉協会(MMCWA)傘下幼稚園の大中修繕費用の支援先が固まりました。今後、見積もり確認の上、送金予定です。また22年度支援の結果についても各々の修繕前後の写真を入手して確認しました。



全土、約300の幼稚園の中には休止を余儀なくされているところや本部との連絡が満足にとれないところもありますが、物価高で教員給与にも苦勞しながら各々の町で幼稚園を支えていることです。

またネピドーで在籍者約1100名を要する児童養護施設サマタン園の大学生25名に支給している梁井新一奨学金も昨年11月に打合せのあと、ようやく詳細資料が届いて先日、下記の耕運機取得費用とともに送金しました。

またサマタン園の女性2名が弊会の支援で、昨年7月から(公財)オイスカ様のマンダレーの研修所で農業、食品加工等幅広い研修を受け、3月1日無事修了しました。

サマタン園に耕運機

ミャンマー、ネピドー郊外のサマタン園(在籍約1100名)にAMCWAの支援でトラクター、三輪トラックに続き耕運機が入ります。



★総会開催★ 5月18日土曜日午後2時より、日比谷の国際ビル、日本倶楽部にて総会を開催します。活動報告、決算、会計監査及び活動計画、予算と役員人事が討議されます。正会員は出欠葉書によるご返信をお早めにお願いたします。一般会員や支援者の方々、関心をお持ち下さる方も是非ご参加ください。活動と現地の様子が分かります。ご連絡お待ちしております。

■AMCWA 会報 48 号付録

ミャンマーのゆくえ(1 ページより続く) 副理事長 寺井 融

完成したら電力が国民の役に立つ、タイに電力輸出して外貨を稼ぐと判断したのである。

総選挙の実施を

1 月末に政権側から「非常事態体制の 6 カ月延長」が発表され、総選挙が先送りとなった。もし選挙となった場合、NLD は排除されるであろう。それでも、ダミー政党を利用して影響力を行使したらよい。お隣のタイでは、クーデターで政権を下ろされたタクシン派が後継政党で選挙にチャレンジし、ついにはまた政権に参画したではないか。もっともミャンマー政界に、そんな柔軟性があれば、....

シャン州、州都タウンジー

ミャンマー北部、シャン州の州都はタウンジー市、最大都市・ヤンゴン、旧王都・マンダレー、首都・ネピドーなどに続く、ミャンマーの中核都市である。

今年の 1 月、在ミャンマー日本大使館から《タウンジー近郊で戦闘が行われている》との「注意報」が発せられた。

シャン州の多数派はシャン族である。「タイと同じ言語、文化を持つので、タイ社会に簡単に同化できる。タイ・ミャンマー国境の

広い地域で国軍と少数民族との戦闘が継続しているが、タイ側のカレン州との国境地帯には多数の難民キャンプがあるのに対し、シャン州との国境地帯には難民キャンプが全くないという。理由は「シャン族難民は、そのままタイ社会に入っていける」から

だそうだ（「ミャンマー話題集」より）

今回、国軍を攻めているのはシャン族ではなく、黒い衣装で有名なパオ族である。パオ民族解放戦線(PNLO)やパオ民族解放軍(PNLA)などの武装組織もある。ミャンマーの琵琶湖とも言われるインレー湖の源流を訪ねた際、パオ族の親分が子分をつけてくれた。子分は腰に小銃をたばさんでいる。民族軍といっても、近代的な訓練を受けた軍隊から、軽武装でヤクザみたいな夜だけの支配者もいる。

このインレー湖やミャンマーの軽井沢とも称されるカロー地区は、いまのところ戦闘が起こっていないらしい。

反軍政の最大勢力NLD(国民民主連盟)は、民主派とも呼ばれてきたが「内部ではアウン・サン・スー・チー女史による事実上の独裁体制が敷かれている。むしろ軍事政権側の方が集団指導体制であり、内部の意思決定手続きはより民主的」(「ミャンマー人の国民性から考えるミャンマーの現状と今後」参照)だと研究者に分析されている。

とは言え、「朝日」が「拘束のスーチー氏『私は元気』と英国在住の次男に手紙を送った、と報じた(24年2月4日付)。

タウンジーの思い出

以下、参考までに「旅行記」を転載する。
《頂上だと思えば大きな町が出現した。シャン州の州都、タウンジー市は 1430m の高地にあって、子供たちは長そで姿だ。町はずれの丘の上にある僧院は、戦時中、日本軍部隊が英軍の機銃掃射を受けた場所。9m 余の立釈迦像のおかげで命拾いをした兵士たちが戦後、金箔を贈っている。像の後ろに寄贈者名の刻印があった。(裏面につづく)

隣接の孤児院から読経が聞こえてくる。7歳から16歳までの少年僧二十数人が、お経をあげていた。シャン族やパオ族の子供たちが多く、学校に行かず読み書きを教わっている。宿に戻って横になっていると、窓から煮豆売りの声が聞こえてきた。追いかけて遊ぶ子供たちの歓声が、それにかぶさる。宿は下町の路地にあった。駄菓子屋や貸本屋、雑貨屋にミャンマー人の常食の麺(モヒンガー)屋が軒を連ねる。

「ベーミョ、ベーミョ(煮豆、煮豆)」の声。

懐かしく感じられた》

(寺井融記、「産経」2001年10月4日付夕刊)

■AMCWA 会報 48号付録

ミャンマー、小学校支援の意義(1ページより続く) 常務理事 小池 匠

募金していただいた12万円以上のお金は全額ドルに替えさらにミャンマーチャットに替え教員の給料の補助と1万円程度小学校を運営する僧院の寄付とする予定である。

私をミャンマーに導いてくれた、故川商川畑俊彦会長から託された寄付金の一部は小学校の生徒約210名分のお菓子代とさせて頂く。私がこの小学校を支援するまで、この小学校の児童は、チョコレートは食べたことが無かった。

ミャンマーの日の出は遠く、はるかかなたにある。たった一つの小学校の支援で大きく変わるものではない。しかし日本人が一人でもミャンマーの子どもたちの将来を考え、行動するのなら、その支援の輪は少しずつ大きくなりミャンマーの将来を担う子どもに一縷の希望をもたらすように私は思える。

グローバルフェスタ 2023 AMCWA展示パネル

